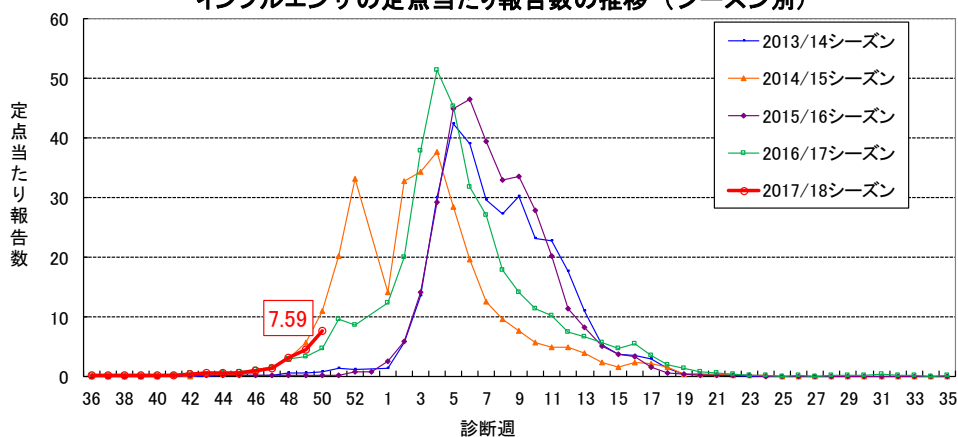


【今週の注目疾患】

【インフルエンザ】

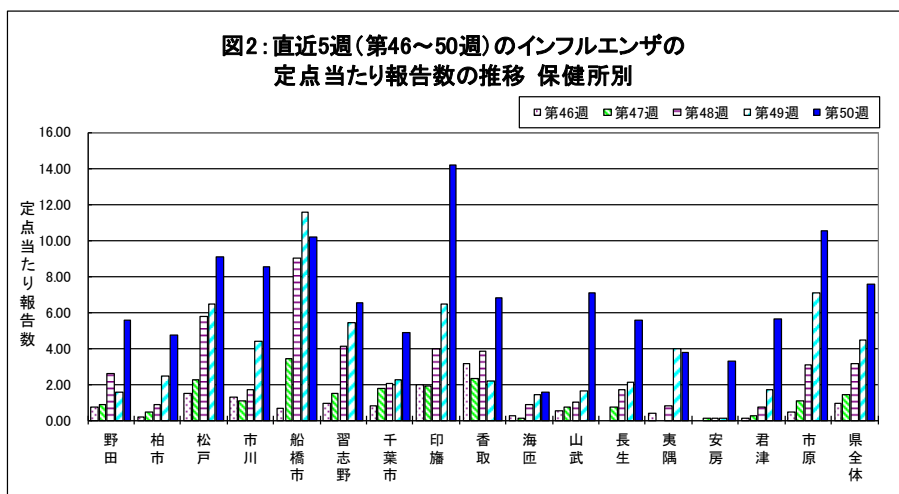
2017年第50週の県内定点医療機関から報告されたインフルエンザの定点当たり報告数は7.59(人)となり、前週(4.50)より増加した(図1)。

図1: 2013～2017年第50週に県内定点医療機関から報告されたインフルエンザの定点当たり報告数の推移(シーズン別)



県内16保健所管内(千葉市、船橋市および柏市含む)のうち、14保健所管内において前週より報告が増加した。県レベルでの定点当たり報告数(7.59)を超える保健所管内は、報告の多い順に印旛(14.21)、市原(10.55)、船橋市(10.18)、松戸(9.08)、市川(8.50)であった(図2)。

図2: 直近5週(第46～50週)のインフルエンザの定点当たり報告数の推移 保健所別



今シーズンこれまでの傾向として、昨シーズン同時期と比較すると患者全体に占める小児の割合が大きい。昨シーズンの第36～50週に報告された患者全体に占める0～14歳の患者の割合は合計53.7%(0～4歳12.7%、5～9歳20.6%、10～14歳20.4%)であったが、今シーズン(第36～50週)は73.3%(0～4歳17.5%、5～9歳38.3%、10～14歳17.5%)となっている。国内における直近のインフルエンザ検出状況では、AH1pdm09が最も多く、次いでB型(山形系統)となっている。第50週に県内定点医療機関の協力によるインフルエンザウイルス迅速診断結果の報告では、A型が74.2%、B型が25.6%であった(0.2%はAもしくはBに陽性)。地域によって両ウイルス型の検出割合は大きく異なっており、市川、夷隅保健所管内ではA型よりB型の割合が高い。今シーズンこれまで県や国レベルにおいてもB型インフルエンザウイルスの検出頻度が高いが、WHOのFluNetや各国のサーベイランスリポートによると、日本を含めた東アジア(中

国、韓国や台湾など)において同様の傾向が認められている。引き続き、ウイルス検出状況や入院サーベイランスを含め、今シーズンの発生動向に注意が必要である。

参考・引用

厚生労働省 インフルエンザの発生状況について(12月15日)

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000188185.pdf>

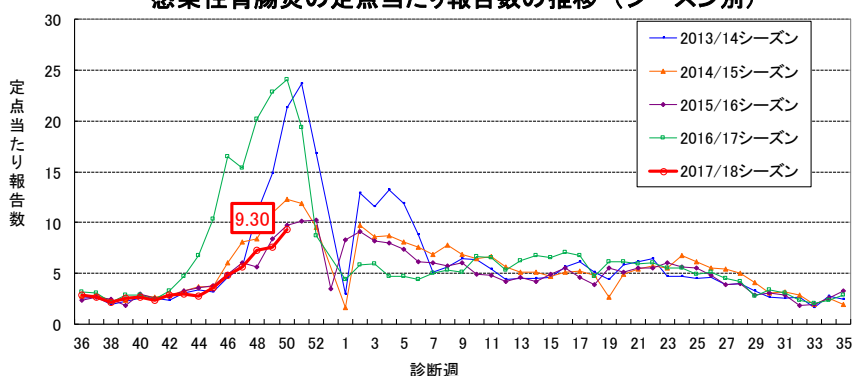
World Health Organization FluNet

http://www.who.int/influenza/gisrs_laboratory/flunet/en/

【感染性胃腸炎】

2017年第50週の県内定点医療機関から報告された感染性胃腸炎の定点当たり報告数は9.30(人)となり、前週(7.56)より増加した。感染性胃腸炎はウイルス、細菌や原虫・寄生虫など様々な病原体が原因となりうるが、この時期は特にノロウイルスによる感染性胃腸炎の報告が多い。過去のシーズンにおける感染性胃腸炎の動向を振り返ると、感染性胃腸炎の報告は第50～52週あたりでピークを示す(図3)。

図3: 2013～2017年第50週に県内定点医療機関から報告された感染性胃腸炎の定点当たり報告数の推移(シーズン別)



今シーズンの感染性胃腸炎の報告は昨シーズンと比較すれば少ないとはいえ、今シーズンもノロウイルスを原因とする食中毒や施設での集団発生が報告されている。食品の十分な加熱や手洗いを励行し、また吐物等は適切な処理を行ない二次感染の発生に注意が必要である。